

ひと ひと  
女と男グッドパートナー  
いきいきフォーラム

# 目からウロコのニュースの読み方 男女共同参画とメディア

日時 平成30年(2018年)1月28日(日)午後2時~  
場所 共同福祉施設(サンライフ甲西)

ミニ講座

ニュースの裏側に私たちの気づかない男性と女性の大きな変化が出ています。  
なぜ男女共同参画、女性活躍といったものが必要になってくるのか、3つのニュースの背景から探りましょう。



取り上げたニュースは・・・

## ニュース1「保育園落ちた、日本しね」をめぐる反響

匿名ブログ「保育園落ちた。日本死ね!」が注目されて間もなく1年。4月入所をめざした認可保育所の選考結果通知が2月から本格化し、落選ラッシュで今年も親たちが悲鳴を上げている。

## ニュース2「電通過労自死事件」

違法残業をめぐる労働基準法違反罪に問われた広告大手「電通」の事件で、東京簡裁(菊地努裁判官)は10月6日、求刑通り罰金50万円の判決を言い渡した。

## ニュース3「赤ちゃんポスト運用10年」

親が育てられない子どもを匿名で預け入れる慈恵病院(熊本市)の「こうのとりのゆりかご」(赤ちゃんポスト)の運用開始から10年が経過。9月23日、ポストの運用を検証する市専門部会(部会長=山縣文治・関西大教授)は大西一史市長に検証報告書を提出した。



◆講師・コーディネーター紹介◆  
竹信 三恵子さん(和光大学教授・ジャーナリスト)

朝日新聞経済部記者、労働担当編集委員兼論説委員などを経て2011年より現職。非正規労働問題やジェンダー問題、働き方と貧困の関係などを中心に取材を続け、現在は労働社会学、マスメディア論などを専門にしている。著書に、「正社員消滅」(朝日新書)「家事労働ハラスメント」「女性が活躍する国しない国」(岩波書店)「ルポ賞金差別」(筑摩書房)など多数。

## ニュース1

ニュース1「保育園落ちた、日本しね」は政策の不備について非常に挑戦的に投稿したものの。マスメディアではなく、ネットがこの話題を拾い上げ、「正しいではないか」と拡散し、マスメディアがこれに追随し、ついに国会の質問に取り上げられていくという経緯がある。背景にはマスメディアが取り上げてくれないお母さんの小さいけれど大きな不満がある。日本の女性記者の割合はわずか16%。だから、女性が実感を持っている社会問題について

マスメディアは大きく扱ってくれない。

日本は家族関係の支出と教育関係の支出が国際的にみて非常に少ない国。日本は小さな政府。生活関連に関する支出が少ない。アメリカは小さな政府で「みんな自分で勝手にやってください」というのがはっきりしている国だが、日本はその次くらいに家族関係の支出が少ない。どうしてか、というと「家族に関することは全部お母さんがやってください」と言ってきたから。とてもお母さん依存が高い。「それでもいいじゃないか」と思う人もいるかもしれないが、そんなにお母さんがやることが多いと、女性は外へ行って働けない。これまではお父さんに大量にお金をつぎ込み、それを家族で分配してきた。日本は、お父さんの賃金とお母さんの無償の育児と介護で成り立っているのだから、財政支出が極めて家族に対して少ない社会。戦後からずっとこうやっ

てきた。こうなるとお父さんにお金が落ちなくなるともう終わり。待機児童問題も「お母さんが子どもを家で見てくださいね」という社会だったので、保育園が発達しなかった。しかし、1997年以降、日本はずっと賃金が下がり続けている。主要な産業も海外に出て行っている。お父さんが家族賃金を稼ぐことができなくなってきている。これが普通の話。見えないところで貧困化が進んでいる。両方が働かないと成り立たない世界にとっくになっている。

お父さんが家族賃金を稼ぎ、お母さんが家で家事・育児を担う構図は日本独自のものではなかった。かつてはアメリカやヨーロッパでも同じ形態だった。しかし今は全世界的にも製造業は賃金の安い国に出て行っている。そこで働く場を補うためにサービス産業を発達させた。もう一つは両方が働くことで生活を良くしていくというふうに世界的には政策転換がされていっている。女の人が働きに出られないのは頭が悪いからでも、力がないからでもない。家にいて家のことをやっているから出られない。男も女も1日24時間しかないのだから。そうなると保育や介護について公的なサービスを整えていかないと女性は外へ出ていけない。先進国では、税金を大幅に社会保障費へ振り分けるという動きが出ている。ケア施設や保育施設の整備と労働時間の短縮を両方で進める。企業が労働時間を短縮することで、家庭内のケアと労働の両立をしやすくし、行政がそのための施設を作る。夫は労働時間が減ることで家庭での役割を分担でき、家庭内での役割を分担することで女性は外へ働きに出ることが可能になる。

日本はここが変わっていない。お父さんは長時間労働でなんとか稼ごうと必死になる。保育や介護に十分にお金が来ていないなかで、女性は同じようには（長時間労働では）働きにいけない。そうすると、「うちのかみさんに言ってもなあ、パートぐらいしか行けないし、俺ががんばるしかないか」とお父さんが増々長時間労働になる。さらに女性は外に働きに行けなくなる。悪循環になっているのが現状。それを変えるのが女性活躍であり、男女共同参画である。

日本しね、が大問題になって保育園の定員は増えた。全体では定員を満たしているが、地方では足りているが、都市部では足りない。もう一つは0~2歳の保育が足りていない。3歳までお母さんが育てないと子どもがぐれるという3歳児神話が根強い。さまざまな研究や1998年の少子化白書でこの因果関係はないことは証明されている。劣悪でない使いやすいケア施設があることと、やはり長時間預けるのは良くないので労働時間短縮ができれば預けても大丈夫というのが実態。日本の場合、長時間労働で長く預けなければいけないというLow&Lowの問題と、いい保育園が足りないという問題がある。その問題を解決すべき。3歳児神話でいう「子どもに影響が出ること」を防ごうとすると、3歳までお母さんは家にいなければいけない、ではなくちゃんとしたケア施設があることと、労働時間短縮ができればなんとかなる。家事専業のお母さんでも虐待が起こっている。核家族では「3歳までお母さんが育てる」がマイナスになるケースもある。誰にも相談できない、ひとりでがんばらなければいけなくて鬱になったり、子どもにあたってしまったりする。発想を大転換しなければいけない。

## ニュース2「電通過労自死事件」。

男一人で家族を養えと強く言われているし、実際（家庭内のケアのためパートでしか働けない）女性の賃金は安すぎる。いまは経済も成長しなくなり、グローバル化の影響で柱であった製造業も海外に出て行ってしまっている。そういう中でなんとかしようとする長時間労働になっていく。労働時間の平均で見れば日本もどんどん減っていてヨーロッパ並みになっているように思われるが、これは女性のパートが増えているから。男性正社員の労働時間はほぼ横ばいで減っていない。そういう状況で女性が正社員で活躍しようと職場に行くところという事件が起こる。男性並みの長時間労働で若い女性が入っていく。もちろん若い男性も過労死しているが、女性の場合はなおさら大変。「女がこんなところで働けるわけない」というけっこう冷たくて厳しい視線に晒されがち。こんななかで人に悪く思われないようにしようと緊張して、がんがん仕事をして死んでしまうというケースが女性には多くある。ちょっと手を抜くと「やっぱり女はだめだ」「そんなだと次は女性を取らない」など言われ、プレッシャーがかけられる。認められるために証明しなければいけない度合が男性より高い。年寄り

は長時間労働が脳や心臓に来るが、若い人は脳や心臓は丈夫だからメンタルに来る。脳や血管にくるか、メンタルに来るかの違い。心が弱いわけではない。だから若い人は自死する。



働こうと思うと長時間労働を求められる日本の体質、それは男性がバックに奥さんがいる、家族を養うために一日中めいっぱい働いても当たり前という慣行のなかでやってきたから働く時間が長引きがち。パートでも日本はけっこう長め。女性が家事・育児をやりなさい、というのは変わっていないなかで、働きに出ると男性並みの長時間労働を強いられる。賃金をもらう労働と、無償の労働（家事など）を合わせた女性の労働時間はメキシコに次いで長い。これではとてももたないで女性は正社員を辞めるとか、子どもが生まれるとパートになるとかということになる。「女性が自分でパートを選んでいるからいいじゃないか」と言う人もいるが、日本のフルタイムの働き方が変われば自然とその選択は変わってくるはず。技能もスキルもあるのに、子どもが生まれると最低賃金に近いパートしかできない女性のなかには、本当は働き続けたかったけれど体がもたないから諦めたという人もたくさんいる。活躍しろと言われてもこの構造をなんとかしないとできない。

### ニュース3

3つ目のニュース「赤ちゃんポスト」。母親が無責任だという非難もあるが、この背景には日本の大きな変化がある。女性の貧困がすごい勢いで増えている。働ける年代の単身女性の3人に1人が貧困ライン以下にある。日本は女性が男性と結婚しお金をもらってればそこそこの豊かさで生活できるという設計になっている。働く女性の57%は非正規なので、単身女性の3人に1人は貧困ライン以下ということになってくる。非正規の74%は年収200万円以下。とりわけ厳しいのはシングルマザー。男性世帯主には家族賃金を支給しなきゃねという社会的な圧力が働くが、女性の世帯主には「女だから」その圧力が弱まる。となると50%以上が貧困ライン以下になるという現状がある。そうなるとうちで赤ちゃんを産むようなケースになった場合、赤ちゃんを置き去りにするようなことも起こり得る。男性すべてが家族賃金を稼げる状況になくなってきていることが1つ、そういう中で離婚も出てきているし、働く女性の57%が非正規。一方で活躍して男性並みの賃金をがっちり稼ぐ女性も出てきている。まずいのはそういう女性だけが注目されるので、全部が良くなったかのような錯覚をもたらすこと。

女性の貧困をもたらす原因の1つ目はさきほど言った経済的な貧困。2つ目は相談する人がいない人間関係の貧困。低賃金であっても周りに相談する人があって「助けてあげるよ」と言われたらなんとかがんばれたと思う。とりわけ非正規で周りに親族がいない人というのはほとんどが人間関係の貧困に陥ってしまう。正社員だと周りに助けてくれる同僚がいる。短期で仕事が変わる非正規はそういう関係ができてにくい。行政の相談窓口もあるが、なかなか機能しない。それ以上にまずは「行政に相談に行ったら」と言ってくれる人が周りに必要。役所に行ったことのない人は若い人にもたくさんいる。特に若い男性はまったくつながりがない。そして性教育の貧困。産めないんだったら避妊をすとか、断る権利があるというふうに言える人だったらなんとかなる。若い女性で自分に自信がない、男性に気に入らなければならぬと思っている人はたくさんいる。そういう人は迫られると断れない、妊娠すると責任も取ってもらえない。そういうケースが出てくる。性教育は避妊をすることだけでなく、断ってもいいとか自分を尊敬する気持ちを持てる教育をすることが大事。自分の体は自分が決めてもいいんだということを若い人にわかってもらうことが大事。男性もそういう気持ちを尊重することが大事ということを性教育で伝えること。

家事を低く見積もり、「家事をやっている人は会社に来なくていい」という家事を蔑視・排除をする嫌がらせを「家事労働ハラメント」と名付けた。

これを解決していくためには下記のような改革が必要。

- 企業には、生を支える労働を見込んだ労働時間設計
- 行政には、女性だけに抱え込まされた育児・介護を分担する公的施設を
- 男性には、増えた生活時間で女性の無償の労働の分担を
- 女性は空いた時間で経済力をつけ、男性の経済負担を分け持つ

## パネルディスカッション

どのようにしたら私たちは男女共同参画を進めていけるのか、地元のパネリストから取組を聴くことで、  
どういう解決策や提案がされているのか、身近な話に落とし込んでいきましょう。

### パネリスト(五十音順)

伊東民恵さん：元幼稚園教諭で現在は湖南省商工会勤務。女性の起業を応援中。

宇野拓也さん：保育士7年目。市内こども園で5歳児クラスを担当。

奥美智子さん：中学校教諭、現在は休職し、専従役員で滋賀県教職員組合女性部長を務める。

中野龍馬さん：本業はHP作成など。市内でコワーキングスペースを運営している。



竹信：今日はどのようにしたら私たちは男女共同参画をやっているのか、ということで先ほどの問題解決も含めて、皆さんがどういうことに取り組んでいるのか、会場の皆さんも関心があると思うのでお願いできますか。

中野：僕は本業でHPやチラシを作っている。もう一つ、勉強や仕事をしたい人に向けたフリースペースの運営している。僕自身の家族・家事への関わり方で言うと、妻は専業主婦ですっとしてもらっている。というのは、地方で3人の子どもがいて夫が一人で食べさせるというのは、なかなかサラリーマンでは難しいと感じている。そのことも考えて独立して、今なんとか食べていけているという感じ。働き方に関しては、独立してやっているから家事も手伝っている。地方の人こそ、男性も女性も働く選択肢としてなぜ雇用されることが絶対条件なんだろうということは常々感じている。

宇野：こども園の教諭をしている。一般的に見ると子ども達と生活をともにしたり遊んだりして1日過ごすというふうに思っていたかと思う。こども園なので、2時にお迎えが来られる幼稚園タイプと6時にお迎えが来られる保育園タイプの両方の子ども達がいる環境で仕事している。1年のなかでも運動会や発表会などの行事もあり、子ども達といっしょにする前に段取りが

あって、用意するもの、考えること、製作したりピアノの練習をしたり、僕たちの仕事は準備や考えたりすることが思ったよりたくさんある。それを子ども達に携わっている時間以外にしたり、お休みの日にしたりとても下準備の多い仕事なので、その辺はほかの人から見えにくいところじゃないかと思う。先ほどの講座を聴いていて、保育士や職員が増えることで、子ども達の受け皿が増えたり、おうちの人が過ごしやすい社会になっていくのかなと感じた。保育士が増え、もっと豊かになればいい。

竹信：昔は保育士というと女性のかたが多かったので、新しい分野で活躍されているなあと思うので、また後でお話を聴かせてください。

伊東：国から起業の応援を下さい、特に女性活躍推進ということもあってか、女性の起業のニーズをすごく感じる。中野さんのお話ともつながるが、女性は子育てになるとパートに行くと言わかんじだったが、パートではそんなに稼げないし、慌てて帰って子どものお迎えに行ったり、ということもある。市内で家の隣でケーキ屋さんを起業された女性がいる。そうすると子どもが帰って来たときに「おかえりなさい」と言える喜びがあるとおっしゃっている。講座でも先生がおっしゃっていたが、この人も結婚する前は有名なケーキ屋さんでパティシエとしてバリバリ働いていて、スキルをすごく持っているが、結婚・子育てというなかで仕事を辞めざるを得なかったという。新しい働き方としての起業を商工会としても応援していきたいと思っている。

竹信：従来の働き方もどんどん減っている。中野さんや伊東さんのように新しい働き方を作っていくというのも非常に大事。

奥：教職員はブラックな職場ということで、社会的にも認知されるようになってきた。過労死レベル



で働いている教員が小学校で3割、中学校で6割と言われている。原因としては業務の多さと人員不足ということが言える。そういったことのなかで育休などの権利を行使するのは大変。一方で先ほどの講座では、女性は育休は1年くらいで休みすぎると仕事がなくなってしまう、というお話があったが、学校ではありがたいことにそれはなく、女性については育休はほぼ100%活用できていると思う。3年丸々とするという人は少ない。女性活躍の事業主行動計画もできたので、男性の育休取得目標もあるが、2%くらいしか取れていない。「男やのに、なんで育休取るの」というハラメントが起こっているということは聞く。でもそれは言い出しにくいし、小さい子どもさんがいる男性教員に「早く帰ってあげや」という余裕はどこにもない。女性はそういうことは言われても男性は言われないということはあると思う。女性がリーダーシップをとるといふ仕事の流れはできているが、管理職が増えるかと言うと仕事は増える、家のことはせなあかんでなかなか増えない。教員の仕事は夢があるが、「子どものために」という言葉は、子どものために100%尽くせない、育児などで制限を受けながら働く人を世間はよく思ってくれない。

竹信：「子どものために」「〇〇のために」自分を犠牲にするような人を高く評価してしまいがち。それが本当に子どものためになっているのか、マイナスになっていないのかということに気づかないといけない。

先ほど3つのテーマの解説をしたが、皆さんはそれぞれどうすればいいと思われるのか、お一人ずつお聞かせいただきたい。



◀奥美智子さん

## ニュース1「保育園落ちた、日本しね」をめぐる反響

中野：あのニュースを見て単純に不思議だったのは、「滋賀県だったら保育園入れるのにな」ということ。そんなに東京って入れないんだ、そんなに苦しい思いをして東京にいなければいけない理由ってなんなんだろうって。別に地方に帰ったり、1ターンして地方に行くという選択肢もあるのに、その人たちがその選択肢を取らない理由は何かあるとは思う。でも地方では1ターンなど力を入れているけれど、その情報を知らないとか、行政に相談しにいけるとか、そういう意識の部分を作ってあげる、その人たちがちょっとでも相談できる、そういう情報を取得したら人生何かが変わるとか、住み心地良くなるというのを個々が知ってもらえれば、地方はまだ人足らずな状態で、女性も働きやすい会社がいっぱいあるだけに、新しいお金を投入しなくてもいいんじゃないかな。

竹信：地方と都市との mismatches がものすごく大きい。特に働き盛りのひとに地方には来てほしいと思っている。シングルマザーの人はぜひ来てくれという自治体もけっこう出て来た。「来たなら？」というのも1つの解決策。でも来ない理由というのもある。それはまた後で。

奥：保育園がなかなか増えないのは予算的なこともあると思うが、建てるとなっても「騒がしくなる」とか反対があって難航しているということも報道されていた。例えば、子どもを連れて電車に乗るとか、公共に出かけるという時に思うが、それが迷惑をかけてはいけないという世の雰囲気と言うか、そういうのがあって、育休の話にも通じるが、「別に迷惑かけてもいいやん、そういう時もあるやん」というところを受け入れる部分が欠けてきているように感じる。色んなことを自分の責任にされていて、それをみんなで支えていこうというところがないと感じる。

宇野：子どもを受け入れる定員は増えたというデータがあったが、そこに勤める保育士であったり、志す学生が本当にいて、施設を利用して子どもが受け入れられるのかなというのは疑問。持ち帰る仕事の多さや、やってみたら違ったという声もあたり、魅力を感じて保育士・幼稚園教諭をめざす人というのはだんだん少なくなってきた。実際保育士も減っていると感じている。他の市であれば手当が色々ついたり、お金で魅力的な仕事としているところもあると思う



が、早急に保育士と言う仕事をしたいと思って、実際に働いてくれる人を増やさないと、どんどん地方でも都市と同じようなことが起こるのではないか。

竹信：1つにはやはり待遇がある。保育士や教諭は人を育てる重い仕事なのに待遇は悪い。東京では潜在保育士（資格を持っているのに保育士として出てこない人）の調査をしたところ、47%が待遇が悪すぎてそれだったら違う仕事をしたほうがいい、と回答した。

伊東：自分のことで言うと同じ居しているのに、保育園も就学前だけでよかったし、ずっと働き続けられる。逆に言うとそういう選択肢もあるのでは。同居にもいい面はたくさんある。ただ今日の講義で日本は家族支出が非常に少ない国で、お母さん依存してきた国だというのはなるほどなあとあって、これから日本が女性の社会進出を本気でめざすのであれば、ここを変えなければいけないと思った。

竹信：おばあちゃんとの同居はいい人もいるし、ダメな人もいるので、「おばあちゃんがいなくてダメ」となっちゃうと選択肢がなくなる。私のように午前1時・2時に帰るような働き方だと、60歳超えた母にはしんどくて鬱になった。「おばあちゃんに見てもらえばいいでしょ」になると危ない。「それも悪くないよ」はあってもいいけど、たいして日本の場合はそれが「預ければいいじゃない」になってしまう。自己責任の方向に転換してもらおう。

中野さんが最初におっしゃってた「なんで帰ってこないの」については、うまくいくと本当にいいと思う。保育園も余っているし、自治体は来てほしいがっている。なんで来ないのか。若い女性に聞くと、自治体によるが女性が活動をするのを抑え込む空気が地域によってはあり、封建的で帰りたいくないという。うちの自治体は夫婦別姓やってみて、みたいな割とぶっ飛んだ男女共同参画やってみてという要望をすると、そういうこだわりの強い元気な女性が来るかもしれない。シングルマザーなんかもそう。来たら仕事あります、保育園もあります、みんなで支えます、と行って来てもらってる自治体もある。女性がモノを言うのを嫌がる風土も地域によってあるので、それは変えたほうがいい。

中野：いま2拠点生活みたいな新しい生き方もあって、月の半分は東京、月の半分は滋賀県みたいな。体験移住のようなことを地域として行政としてそれをやりませんか、というところもある。でも

まだ全然浸透していない。知る、知らないって思っている以上に大きい。それは収入や生き方にもつながってきて、知るだけで新しい道、選択肢が増える。日々の生活のなかでその情報を仕入れるのに行政に行くのは難しいと思う。伝えたい行政側、制度を作っている側は、もっとそういう人たちに気軽に伝えられる環境（インターネット、SNSなど）を活用すべき。

竹信：成功例があると、その人たちが発信するときとうまくいくと思う。地方に住みたい女性たちでいいモデルを作って、その人たちが「楽しいですよ」ということを発信できればすごくいい。

中野：湖南省は特徴のないまちと言われるし、住んでもそう感じるが、そういうのって2拠点生活を進めることで移住問題もクリアになったり、女性の働き方・生き方の部分もやさしくできるまちということが伝えられるのでは。

竹信：男女共同参画都市、みたいに打ち出して先生の働き方も含め、総合的にできれば違うこともできそう。

次のテーマ、電通の過労自死。皆さんはあまり実感ないでしょうか。



## ニュース2「電通過過労自死事件」

伊東：残業の問題でいうなら、業務を減らさず残業を減らせというのではどこかにしわ寄せがいくのでは。電通の問題にしても、その人のところに仕事が行くというのが日本ではけっこう多いので、これから働き方改革を進めるにあたって、業務分担がしっかりあれば仕事の区切りもつけていけるかもしれないが、今のままでは持ち帰りの仕事やサービス残業になるだけ。

宇野：そこまで残業時間が多かったりとか、先生方の想いでどこまでするのか、こなす量も違ってくるかと思うが、保育士はやり取りが多い職場なので孤立感はない。手伝ったり、みんなで分担したり、行事だったらそれこそみんなでいっしょに取り組む。量はあるかもしれないが大変さは少ない。このニュースを見て思ったのは、家族や友だち、メディアに言ったりできなかったのか、事件になってから改善されるのはすごく残念なことだと感じた。

竹信：電通はエリート職場という気持ちがあるので弱音を吐きにくい。保育士は助け合える職場ということですね。

奥：教職員という前にここで言いたかったのは「女だけど男並みだと証明するためにがんばらなきゃいけない」というのは私が今すごく実感していて。教員だったときは男女比率も同じくらいだったが、今は景色が真っ黒。どこに行ってもスーツばかりで、20人いて女性が1人とか。女が少数で「女やから」と言われられないように変に気負ってしまって、「女性の代表として女性の意見を述べなきゃ」とかそういうふうに思ってしまって、自分がものを言わないと責任を果たしていないな、みたいなの。

長時間については先ほどもブラックだと言っていたが、中学校は部活ってというのが大きくて、ブラック部活とも今言われている。特に男性が家庭があっても土日でも出て子どものためにがんばるのが当たり前とされている。部活離婚、部活非婚もある。男性女性関わらず部活をがんばっていたら結婚しなかったとか、子どもを持たなかったとかそういうことはよくある。部活に関しては子育てがあったらみんなで配慮しようという動きはあって、それも性別によってギャップがあるように思う。

中野：18歳で高校を出て、大津市の設計会社に勤めていたとき朝は7時に出て、帰るのは終電という生活が2年くらい続いた。そうすると最初は辞めたらいい、とかあるけれど、その選択肢は本人には見えない。やらないとダメというルートに乗っているほうが本能的には他に考えなくていいから楽。でも精神的にはギリギリで、僕の場合は辞めて起業するという選択肢もあったからよかった。これは個人じゃ解決できない。社会と会社と、悪い会社はどんどん公表されていくようにしないと。この人が救えたとしても、もっと世には出ていないけど死んでしまうというようなことになる。

竹信：長時間労働というのも本人が相談に行っているのはほとんどない。家族や恋人が「どうも最近帰ってこなくて、顔色真っ青なんですけど」みたいな。

中野：僕、もうひどいなあと思ったのが、帰るときに電車の窓に頭を3回くらいぶつけてたことがあって。起きていたけどわけもわからずガンガンって。これはやばいな、辞めようと思った。

竹信：その時辞めようと思えてよかった。そこでそう思いきれないと死ぬ。

中野：本当に死ぬ。だから個人の判断じゃ無理。

竹信：周りが騒いだり、会社の外にネットワークを持っていて友だちに「それは辞めたほうがいい」とか言ったりしてもらえないネットワークを持っていない人は危ない。自分がだらしなからしっかりしないと、とがんばりつづけて死ぬというのが大体のコース。「そういう時は辞めてもいいんだ」とか事前に知識のある人は辞められる。だから学校の教育は大事。

日本の会社の一番の問題点は「その人にどういう仕事をしてもらうか」ということを誰もはっきりさせていないこと。会社に入ったら「あれやって」「これやって」と適当に言っているだけ。なぜかという管理職の教育がだめだから。日本には管理職という仕事はない。命令するだけ。管理職の仕事は命令することではない。全体を見渡して「あなたはこれをやってください」と仕事の配分がきちりできること。オランダのように短時間労働をいっぱい組み合わせさせて「私は何時間働きたい」というのが正社員でもできちゃうのは、管理職がそういう教育を受けているのでシフトが組める。なぜシフトが組めるかというと、どういう仕事かどれだけあって何人でやらせるかということが頭に入っているのが管理職だから。日本は祭り上げられて甘やかされているから、「俺が命令したのになんでできない」となる。「ちゃんと差配できないあんたがダメなんだ」と下は言えない。管理職の仕事についてきちり認識させないときっと難しい。皆さんのお話にあったように助け合って仕事したり、女性が1人では大変なので女性を増やすようにしたりしなければいけない。女性が増えれば環境は変わる。そうすれば管理職の意識も変わる。管理職はみんな一律だと思っているから命令すればできるはず、で終わってしまうが、多様な人がいればそれでは管理職は務まらない。違う人をどう組み合わせればいいのか考えざるを得ない。



◀中野龍馬さん



◀宇野拓也さん

### ニュース3「赤ちゃんポスト運用 10年」

宇野：受け入れられる体制になってから赤ちゃんを作るというのは大前提だと思う。性教育の貧困というワードもあったが、これが必要と感じた。僕も教科書程度の学習で、この仕事に就くため短大で性教育の時間もあって、少数だったが男子生徒だけ集められて先生と僕たちでリアルな教科書でない話をして、今までにない学びや怖さを学んだ。高校・中学生レベルでもそういう学習がされて、大切さや子どもを育てる厳しさを肌で感じられる授業があってもいいと思った。

竹信：とりわけ子どもさんを導くという立場の人には不可欠。

奥：おっしゃったように性教育については一番に思った。自己決定するというのをきちんと教えられるということが必要と感じた。

女性の自立ということでは、中学2年生で職場体験があるが男女比同じくらいの子供達に「自分にパートナーができたとしてどんな働き方をしてほしいか」アンケートを取った。男子は（パートナーは女性とは限らないが）「子どもができれば仕事を辞めてほしい」という割合がけっこう高く、女子は「一生働き続けたい」というのが多い。そこにギャップがある。男子は「自分は仕事と生活を両立したい」がほとんど、でもパートナーには「家庭を中心に働いてほしい」。社会の性別役割分業意識がもう中学生の段階でいろんなところで刷り込まれてきている。女子に聞くと「ええ人捕まえて結婚したらいいわ」と依存する考え方の子もやっぱりいる。深刻なのはとっかえひっかえみたいに自分の体などを使って依存するという考え方の子もいるので、働くということとかで夢を叶える、やりたい仕事をしましょう、みたいなことだけじゃなくて、もっと自分がWLBを考えながら生活も仕事も充実させるためにはね、というのを学校でもうちょっとやっていかないと。社会の

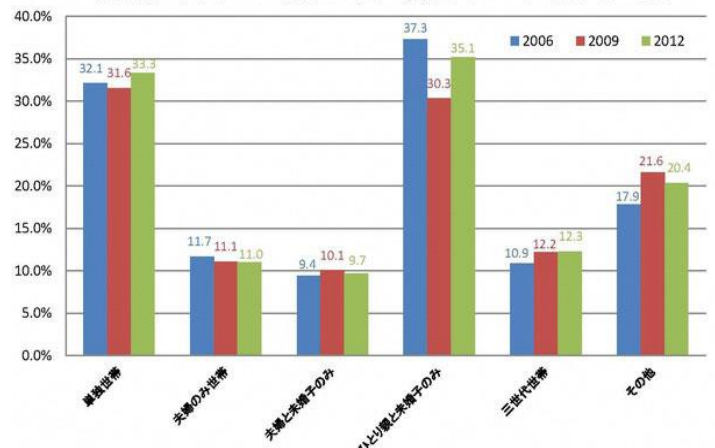
賃金格差とかそういうことは解消していくということを前提にして、そういうこともやっていかなければと痛感する。

竹信：夢とか働くことの実感がなくて、大学生もそうだが抽象的すぎる。労働映画とか見せると「こういうことなのか」とやっとわかる感じ。ゼミで「女性が専業主婦になりたい、ということについて話し合う」ことをやったら、男子学生が「それはテロです」と。男性も非正規になるかもしれないので、養ってなんて言われたら恐ろしくて仕方がないと。

中野：赤ちゃんポストは一体なにが問題なのか。赤ちゃんポストがなくなったら、不幸に命を落とす子どもはもっといると思う。だから存在は大事だと思うが、預ける件数が多いことが問題なのか、件数が問題であるならば預ける人は何を以て預けているのか、言葉は悪いがいらなくなったから預けるのか、いっしょにいたいけど子どもにとって良くないから預けるのか、そのあたりの現状はどうなんですか。

竹信：聞いたところでは育てられないから預けるケースが多い。さきほど説明したように経済的にも、女性が働きながら子どもを育てるとするのは非常に難しい。母親が子どもを育てなければいけないという社会のプレッシャーは強い。大阪で子ども2人を餓死させてしまった母親の事件があったが、離婚の際に母親は高卒で仕事に就いた経験もない自分には育てられないと申し出たのに、「母親なのになんてこと言うんだ」と言われて黙って子どもを引き取ってしまい、結局子どもを閉じ込めて餓死させてしまった悲惨な事件。周りが違うことをしていれば子どもは助かったかもしれない。

勤労世代(20-64歳)女性の貧困率：世帯タイプ別



「阿部彩(2014)「相対的貧困率の動向：2006、2009、2012年」貧困統計ホームページ」より引用





中野：友だちにもシングルマザーはいるが、子どもを育てながら働くのは相当難しいと思う。だからそういう環境になってしまったら、手助けしてくれる地域に移住するとか選択もあるのでは。

竹信：シングルマザーは、それこそ親に見てもらって何とかなっているケースが多いので、移動が難しい。まず仕事を探そうと思っても、お母さんがそばにいて子どもを見てもらってないといけないので一定の地域で仕事を探す。そうするといい仕事はない。

中野：なんでいい大人が子どもを産んで育てられるかどうかを判断できないのかと思う。

竹信：まずは自分の体は自分で決めていいんだよ、というところの教育ができていない。断れなくてセックスして子どもができて、その後中絶などの選択もあるが「してはいけないこと」と言われているから産んでしまう。判断するかどうかを超えている話だと思う。だから、産んでから「助けて」と相談できるシステムや、自分のことは自分で決めていいんだという教育が非常に大事。

中野：学校教育というより、親。それを言うのがタブーみたいにせず。

竹信：その前にまずは親の教育をしないと。親が戸惑っちゃう。

中野：でも学校は負担が大きすぎる。

竹信：それだったら社会教育。家庭にもやっぱり重すぎる。やることが多いから。外部化しないと解決しない。

伊東：望まれない妊娠とかそういうことが起こらないように社会がしていくのは大前提だが難しいことはわかる。授かった命、叶えたかった妊娠が叶わない人もたくさんいる。そういう人たちにとっては腹立たしいこと。赤ちゃんポストの子ども達がそういう人たちと巡り合えるという道として残ればいい。

## 質疑・応答

質問：いま政府で同一賃金・同一労働という言葉が飛び交っている。企業内の組合が弱くなったと思い、そこが問題だと思う。組合がしっかりしていれば自分たちの要望を伝え、職場が良くなる。組合と企業のせめぎ合いがない。組合の意義をみんながもっと認識すべきでは。

奥：組合活動を負担に感じている部分がある。自分たちの労働条件をしっかりとやっていかなければいけないというのはわかっているけれど、忙しくて余裕がなくなってきている。組合の大切さを伝える講座をしたいと高校などには伝えるが、なかなか実現しなくて学校任せになっているのが現状。

竹信：やっぱり学校のなかだけでやるのは限界がある。デモもストも知らない世代。映画などではたくさんあるので、NPOなどがそこを担うとよい。子ども達が何も知らずに就職するとブラック企業もあるのでひどい目にあう。

質問：色んな意見があって有意義だった。働きつづけるための工夫などあれば一言ずついただきたい。

伊東：長く勤めてきた。私の原動力になっているのは「ありがとう」と言ってもらえる喜び。

宇野：苦手なことだったが、声を出すということ。「わからない」「どうしたらいいですか」悩んだり困ったりしたことは相談する。

奥：甘えたいときには甘える。そうしてもいいんだということを発信できていると思うので、いいことをしていると思って甘えている。そのかわり後輩がそうなったときには、自分たちがしてもらったことをするというを決めている。

中野：僕は趣味を仕事にするということ。今は遊んで仕事している感じ。20歳くらいの人に聞かれたら、一生懸命趣味を探すことを勧める。

竹信：自立するというのは自分だけでがんばるということではない。**自立は適切な人を選んでヘルプを言える力**。これが大人の自立。一人でがんばるのはただの孤立。孤立ではなく、自立の力を身につけることで色んなことが広がって、色んなことができるようになる。



◀伊東民恵さん